

---

# ジハード

凶市場

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジハード

### 【Nコード】

N6490Y

### 【作者名】

凶市場

### 【あらすじ】

いきなり異世界に呼ばれ管理者の後継者になった斉藤智久はこの世界で何をしたいのか何を為すのかわからずに情性のまま動く

## プロローグ（前書き）

駄文ですけどヨロシクね

## プロローグ

突然ですが貴方は地獄や天国、ましてや異世界転生や移動などを信じているでしょうか？

不肖、私こと斉藤智久29才は信じてませんでした

ですが家で寝ていたら突然衝撃が走ったと思ったら周りは真っ暗な闇の中で地面はゴツゴツしていた

「人の子よ……」

地響きの様な声に振り返るとそこには金色に輝く竜が横たわっていた

「お主が次の後継者が、では力の継承を始める」

驚いてフリーズしていると竜がいきなりわけわからん事を言った

「何を言ってる……」

何を言っているのかと聞こうとしたら翠色の光に包まれ気を失った  
そして夢の中でここの世界<sup>レイアース</sup>  
の誕生から人類誕生までの物語を観させられた

「ふー、ねえドラゴンさん俺に何をさせようとしてんの？  
つかさ、いきなり人を呼び出して力の継承？って意志の確認なし？」

「そう、怒るな人の子よ、先程みた通りこの世界の維持には我々部外者が必要なのだ」

「まあ分かってるけどさ、さっきの夢の中の説明で」

「ふむ、ならば良いそれに我が死ぬまでの約千年分はお主は自由にこの世界で暮らせばいい

この世界に呼ばれた者はもとの世界に不満がありまた親しい者がいない者のみ呼ばれるからな

この世界でならやりたい事を見付けてやってみればいい  
ただ我が死んだあとこの洞窟の近くに居てくれればよい」

「分かったよ、ありがとなドラゴンさん、あんたも俺と同じように呼び出されたんだろ」

「若者を導くのが年配者の役目だからな

それと身体能力は代々の管理者の力も受け継いでいるから力のいれかたに気を付けろ」

「分かった。

じゃ約千年後にまた会いに来るね」

そして俺はこの世界レイアースに自分のやりたいことを探しに旅に出るのであった

## 第一話

俺（斉藤智久）がこの世界に呼ばれてから約十年

俺は呼ばれた洞窟を出て森を進みなんとか村に着きそこでこの世界の情報を仕入れ適当に世界をまわっていた

この世界は一言で言うなら剣と魔法の世界

つまり中世ヨーロッパに魔法が入った戦乱の世界だ

旅の資金は襲ってきた賊のお金を拝借して旅をしていた

まあ竜の力を受け継いだので賊が何人いても相手にならないから簡単に返り討ちにできたしね

ただ剣で切りつけられても傷一つつかなかった事と魔力が桁外れで想像して魔力を込めると思い通りの結果になることは自分でも驚いた隕石落ちると願えば落ちてくるし、凍れと願えば賊は氷の中に閉じ込められると言った具合にね

5

八年間かけてこの大陸パレンティアの国々を回り終えたので二年前から洞窟のそばの村に一軒家を建てて道楽生活をしている

まあ村の外れの森（天龍の森）のわきに住んで特になにもせずじたま村長の相談役などをしている

ただ力の継承のせいか外見が十代後半になりその外見のまま過ごしているがそのうち若作りにも限界で旅に出なくちゃいけないなるんだろうな

憂鬱だな、せつかく慣れてきたのに

「サイトさん、今年も貴方のおかげで収穫が増えて盗賊や獣害が無

く過ごせた、ありがとう」

「いえいえ村長、私は案を出したに過ぎません」

「いやいや、腐葉土や糞尿を使った肥料や賊や獣対策の柵や鳴子、牛馬を使った田畑の掘り起こし等々、わし等では考え付かない物ばかり、この村がここまで豊かになったのは貴方のおかげじゃよ

所で最近はその噂を聞き付けて近隣の街や村から戦争難民や流民が流れてきているのだが何か良い手はないかのう」

「なら、一ヶ所に集めて共同生活してもらい

田畑の開墾をやらせましょう、食糧は去年と今年の村の蓄えで足りるでしょうし」

「なるほど、お互いに助け合う様にして自立を促すのじゃな」

「ええ、それと一年間の食糧分は開墾した田畑の収穫から取り戻せますしね

ただの浮浪者なら出て行くでしょうし、それでも勝手に村の中に居座ろうとするなら自警団を使って村の外に追い出せばいい」

「なるほどのではそうしようかの、しかし戦争も早く終わって欲しいものじゃ、難民、孤児、兵隊崩れの賊、全ての原因は戦争じゃかな」

「ええ、ですがこの大陸だけで約百近くの国や自治領がありますからまず直ぐには無理でしょうね」

「皆がうちの領主様みたいに民の事をよく考えてくだされば良いのじゃがな」

「まったくですね」

と言う具合に村長に助言をしてのほほんと過ごしていた  
この世界が今は乱世と言うのを忘れて



## 第二話（前書き）

展開速すぎかな

## 第二話

村長に助言しつつ村は発展して行き

十年後ではこの大陸では一番の穀倉地帯になり流民を受け入れ続けた為村の人口も八百人から八万人を超す巨大都市に変わっていった元は名もない村から今では穀倉の都カッターと呼ばれる様になった自警団の方も結成時は二十人位だったが今では総勢千人を越した、無論入団試験をしてふるいにかけているそれでも希望者後を絶たない、まあ給料が普通の農家の倍で小隊長で三倍になるから家の跡取り以外はほぼ全員自警団に入団しようとする、また街が大きくなったので街自体が襲われることは無くなったが街に出入りしている商隊が襲われるので定期的にランダムに賊討伐を行い実戦も経験している

街のなかのごろつきも昔みたいに手におえないからと俺が出てぶちのめす事も無くなった、まあ賊討伐時の指揮を執ったり幹部連中の稽古をつけたりたまにしている

立場的には名誉団長で団の運営は団長一人と副団長三人で決めているまあ近隣ではそこそこ精強で名前が通ってる

そんなある日

「サイトさん、村長いや代官が至急来てくれってさ」

「うん、分かったすぐ行くよ」

代官とは村長が村を大きくした業績からこの辺りを治めるウエルザー侯爵から任命された官位だ

一応このカッターの街の事を侯爵に代わって治める役目だそうだまあ裏では街の事に口出しさせない為にお金を積んで買った官位なんだけどね

「おお、サイトさん呼びつけてすまんのう実はな」

「そこからは私が説明しましょう」

と後ろに蔽ついオッサンを率いた銀髪碧眼のつり目の美人さんが話に割り込んで来た

因みにこの大陸はほとんどがコーカソイドつまり白人である

おかげで日本人の特徴である黒髪黒瞳は淒く目立っていた、まあ他の大陸にいない訳ではないので迫害はされなかった

「貴女は？」

「私はウエルザー侯爵家に仕えるセシル・マルセイユ

ウエルザー侯爵軍騎兵団団長です

この度はカッタート自警団の方に協力を要請しに来ました」

彼女の話のを要約すると敵対してた隣国が攻めて来たので迎撃に協力して欲しいとの事

ここでこの辺りの地図を要約しておこう

カッタートの所属するウエルザー侯爵領はトルメキア王国に属するトルメキア王国の北側はアラゴン王国がありこれは同盟国だ、東側は天竜山脈が連なりその麓が天竜の森になるその向こう側が今回攻めてきたローライズ帝国、南側は小国が入り乱れる南方諸国があり西側は海になっている

ローライズ帝国は今まで天竜山脈が終わった南方からしか攻めてこなかったのだが（天竜の森は普通の人が入ると竜に襲われるので通行不可能）今回アラゴン王国の内戦が起こりアラゴン南方を治める前王弟派と通じて援助する代わりにトルメキアを攻める為に国内の

通行許可を取ったそうだ

北方の最前線の砦ラールゴン城は奇襲により既に落城しウエルザー侯爵領の北側のクリム伯爵が抵抗してはいるが落ちるのも時間の問題、援軍に行きたくとも侯爵自身と侯爵領軍のほとんどは南方から攻めて来ているローライズ帝国本隊と戦闘に駆り出されていて残っているのは騎兵団約三百人のみで北から来るローライズ帝国軍は約一万五千人まず籠城しても持ちこたえられない

なら領内の自警団を使って持ちこたえるしかないそこで領内最大規模をほこる内の自警団を始めに要請しに来たそうだ

「サイトさんには自警団の指揮をとってもらいたいのだがどうか？」

「村長いや代官、指揮をとるのは構わないけど自警団を派遣する事にたいしてウエルザー家の報酬はどうなってますか？」

「ふむ兵士一人につき金貨二枚じゃ」

「金貨二枚か今のカッターの約平均収入半年分だな、悪くはないむしろ今回は守りの戦なのだから出るだけ破格の待遇だよなでも「うーん代官、お金は半分にして今後三年間の税金免除ではどうですかね」

「うん？」

「それではむしろ損ではないか？」

「直ぐには損ですけど税金免除すれば商人達が集まって来て将来的には税金は倍になり得になりますよ  
無論ウエルザー家にとってもね」

「なるほどのう、マルセイユ殿いかがでしょうか」

「我々としても出るお金が少なくなるのは助かる、それで行こう」

「あつただし、我々カッター自警団はウエルザー家の指示ではなく独自に動かせて貰いますよ」

「なに！」

「どういふつもりだ貴様！」

マルセイユさんの後ろに控えていた従騎士が思わず声を出した

「城に籠つても十倍近い敵を相手に持ちこたえる事はできないですよだから我々は夜襲もしくはどこかに陣地を作つて蠢動させて貰いますよ」

狙いは相手の食糧ですね」

「なるほど貴公は別動隊として動きなるべく敵軍の行軍を遅らせる言うことが」

「ええ、そうです」

「分かった、それでは頼むぞ我々は他の自警団を集めに行く」と騎士団長達は出ていった

「サイトさん？」

良かったのか、騎士団と協力しなくて？」

「代官、もし我々が協力して城に籠れば落城する前に正規軍の援軍が来るでしょう、ですが包囲されてる間にカッターを始めこの辺

りの街や村は軒並み荒らされて穀倉地帯の収入を失った我が国は国力ががた落ちしてたぶん敗北、併合されるか属国化するでしょう」

「なるほど、だが勝機はあるのか？」

「ええ、もちろんありますよ

代官、これから言う物や人を揃えて下さい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6490y/>

---

ジハード

2011年12月1日15時45分発行